

【かいだん】

学校には怪談はつきもの。

会談は怪談につながる、怪談は階段につながる。

駄洒落（だじゃれ）的だけれど、駄洒落は莫迦に出来ない。

ぼくの場合は小学校の階段。

二階建てだから、二階に昇る階段、あるいは一階に降りる階段。

あるいは、ではなく、同じものですから、すなわち、でした。

この階段がどうにも妙なのです。

ぼくはいつも階段の数を数えながら、この階段を昇り降りするのですが、数えるたびに数がちがうのです。

初めは、算数が苦手だからとおもっていましたが、ともだちに聞いても同じ答えが返ってこないのですから、ぼくの数えまちがいではないらしい。

十三が一番多く、続いて十一、十二、十四、珍しく四なんて子もいるが、いくらなんでも四はない。

まず、少なくとも十、多くとも十五、というところでしょうか。

どちらにせよ、正確な数字を知りたいのは、人の常。それで、木恒くんに相談したら、

「印をつけておくことだよ。一、二、三、とね」

なるほど、それはいい。

さっそくやってみました。

階段の端に白墨（はくぼく）で、下から一、二、三、と記して、十三数字を書きました。

つまり、この段階では階段は十三階段。

そして翌日。

白墨を確認しながら昇ると、十二。

十三段が欠落しているわけです。

十三はどこいっちまったんだろう。

それで、田貫くんに、十三段を盗まなかったかと聞くと、

「そんなでっかいものは盗めん。おいらが盗むのは、大きくても弁当くらいかなあ」なるほど。

それで翌日。

もう一度確認してみると、今度は十四階段あります。

ぼくが書いた白墨が、どうしたわけか十四段目にもあります。

「筆跡鑑定（ひっせきかんてい）が必要じゃ」

と、田貫くんは難しそうなことを云う。

「この下手糞な字は金ちゃんのものにまちがいないよ」

と、木恒くんは断定するが、じつはぼくにもよくわからない。

だから、おちも、何も、ありません。